

# 「最後の吟遊詩人の歌」

## － 研 究 ノ ー ト －

佐 藤 猛 郎

### 1. 作品の成立

「最後の吟遊詩人の歌」 *The Lay of the Last Minstrel* (1805) は、スコット (Sir Walter Scott) が書いた最初の長編詩で、その清新なリズム、スピード感あふれる物語の進展、随所に見られる愛国的情熱などで、発表当時から、大変な評判をとり、第2作の「マーミオン」 *Marmion* (1808)、第3作の「湖上の美人」 *The Lady of the Lake* (1810) などの方が、構成にも進歩が見られ、より多くの発行部数を数えているにもかかわらず、当時名宰相とうたわれたピット、その政敵フォックスをはじめ、若き詩人バイロンと後に英国王ジョージ4世となった当時の皇太子、それに作者スコット自身も含めて、この作品を、彼の詩の中で一番愛好している読書人も多い。上記のバイロンと皇太子に関してだが、J.G. ロックハートの伝記によると、バイロンは、まだ無名の頃、スコットの「マーミオン」の評判を皮肉った詩、「英詩人とスコットランド批評家」(1809)を発表していた。これに対して、スコットは別に反撥もしていなかったが、バイロンが人気詩人となった1812年頃、書店主マレーの仲立ちで、二人の詩人の間に和解が成立し、二人は深い友情で結ばれるようになったわけだが、この頃とり交した手紙の中で、バイロンは皇太子との会見の模様を伝え

ている。それによると、色々と文学談義を交わしたあとで、皇太子は、バイロンに、スコットの詩の中で、どれが一番好きかと尋ね、バイロンが「最後の吟遊詩人の歌」だと答えると、皇太子は大変喜び、「私もそうだ」と語ったとのことだ。<sup>(1)</sup>

このように、この詩を愛好する人の多いのは、この作品が処女作の故もあって、スコットの内面にたぎる文学的情熱が、この作品の中にストレートに注入されているために、構成上の不自然さをしばしば非難されながらも、内容的、構成的には、より洗練され、より完成された「湖上の美人」などにはない、初々しい魅力が、その中に秘められているためではないかと思われる。

所で、作者スコットの文学活動は、英蘇国境地方の民謡収集にはじまる。彼は幼い頃から、この地方の古い民謡や民話、伝説などを聞いて育ち、その多くを暗記する程愛好していた。しかし、14, 5才にもなると、法律、哲学などの正規な学問ではなく、“the Delilahs of my imagination”（私の夢を誘う妖姫達）と自称する民謡、伝説などの魅力に心奪われる自分自身が、当然のことながら、やゝ気がひける存在になってきていたようだが、たまたま、その頃、パーシー（Thomas Percy）の有名な「英国古詩歌拾遺集」*Reliques of Ancient English Poetry*（1765）を読んだ時の感激が、彼には最初の知的ショックとなったようだ。<sup>(2)</sup>「詩集」自体が大変すぐれていたこともあったが、1つには、このように、古い民謡を愛好し、収集する事が、学術的研究の対象となり、女子供の手なぐさみではなく、男子一生の仕事ともなり得るということが理解できたからだった。

これに勇気を得て、彼は18, 9才から25, 6才頃まで、法律家に

なるための学業のかたわら、又法律家になってからは、その仕事のかたわら、暇を見つけては、国境地方の奥地にわけ入り、忘れられかけた民謡を、土地の古老の口から聞きだして、筆写するという作業を続けていた。又、その取材行中に、当然民謡にまつわる美しいスコットランドの風景、そして、スコットランドの過去の華やかな歴史をしのばせる数多くの史跡に接する機会を数多く持ったはずだ。

1709年の The Union（英蘇統一）を契機として、スコットランドからは、スコットランド独自の伝統的生活習慣が急速に失われ、イングランド的なものに、とってかわられつつあったし、あまつさえ、1745年のチャールズ・エドワード王子による反乱事件以来、スコットランド独自の社会組織そのものまでも、徹底的に破壊されていたので、曾ての誇高き独立国スコットランドの伝統と栄光を留めるものは、これら各地に散在する史跡や、山間僻地に住み、頑くなに旧来の生活を守り続ける一部の人々だけという状態だった。こういうわけで、古いスコットランドの伝統を愛するスコットにとって、この民謡収集は、単に民謡愛好家の収集作業に留まらなかった。彼は、民謡収集を通じて、埋もれかけた歴史を掘り起し、曾ては華やかな歴史絵巻に彩られた祖国スコットランドの栄光を、再びとりもどしたいという感慨にひたったはずだ。この過去よ帰れと願うノスタルジックな憧れに、スコット文学の芽生えをみることができる。

というのも、スコットは、彼の祖先の何人かのように、実際行動、つまり反乱によって、現存の政治体制を変えて、歴史を逆戻りさせることは望んでいない。彼の「理性面」が賛成しないのだ。理性の人スコットの歴史観は、貴族中心の、華やかではあるが野蛮な古い社会は、平凡

ではあるが、法を守る市民社会にとってかわられるべきであるとしているのだ。つまり、古いスコットランドの栄光を憧がれ求めるのは、彼の「情緒面」だけなのだ。この二つの矛盾する自己を抱いていたスコットにとって、この燃え上る「情緒面」を解放する手段として、採用し得る唯一の方法は、文学活動によってこの愛国心を歌うという方法だったようである。彼の収集作業の結実ともいうべき「国境地方民謡集」 *The Minstrelsy of the Scottish Border* (1802-4) の有名な序文をみると、この頃の彼の気持がよく理解できよう。

I may contribute to the history of my native country, the peculiar features of whose manners and character are daily melting and dissolving into those of her sister and ally. And trivial as they appear such an offering to the Manes of a kingdom once proud and independent I hang it upon her Altar with a mixture of feelings I cannot describe.

(私は、その独自の風俗習慣や特質が、姉妹国であり盟邦であるイングランドのものに、日に日に融合し、消滅しつつある我が祖国の歴史に、貢献できればと願っている。そして、曾ては、誇り高き独立国であった王国の霊に捧げるには、余りにさゝやかではあるが、私は、私にも言い表わすことのできない複雑に入り混った気持をもって、この作品をわが祖国の祭壇に捧げるものである。)

この「複雑に入り混った気持」というのが、スコットの内面における葛藤を如実に言い表わしている部分で、スコットにとって、文学活動は、そのスタートから、彼の燃え上る愛国の情を解放する手段となる可能性を示していたといえる。しかし。「国境地方民謡集」においては、彼自身編者に過ぎなかったこともあって、それ程ははっきりとした形で、彼の内面が表現されていたとは言えない。たゞ、この「民謡集」で忘れてはならないことがある。それは、この民族収集を通じて、民謡の中にあるロマンチックな要素と叙事詩的要素という、スコットの詩人としての特質が吸収、醸成され、詩人スコットが生れつつあったということだ。

第2の知的ショックはゲーテによるものだった。18世紀の末頃、ドイツ文学熱が英国全土にひろがり、スコットが住んでいたエジンバラにおいても、ヴェルテル風の感傷家を主人公にした「感傷家」*The Man of Feeling* (1773)の作者ヘンリー・マッケンジーらを中心に、シラーやゲーテなどの作品を読む、ドイツ文学愛好者のサークルが出来ていた。スコットも、友人のすすめから、その一員となって、ドイツ文学に取組み、翻訳にも手を染め、ビュルガーの怪奇趣味溢れる物語詩「レノーレ」*Lenore* を「ウィリアムとヘレン」という題で発表したのが1796年だった。

しかし、次に彼が手がけたゲーテの戯曲、「ゲッツ・フォン・ベルリヒンゲン」*Götz von Berlichingen* によって、彼は大きな開眼をしたのだった。「鉄の腕のゲッツ」という異名をもつこの作品の主人公は、作者ゲーテによれば、「野蛮な乱世における、粗野ではあるが善良な自主独行人」で、作者にも、「この上なく深い共感」を与えたとい<sup>(3)</sup>うことだが、16世紀のドイツを舞台に、私利私欲にあけくれる諸侯や

僧侶階級、それに急速に勢力を伸ばしつつある都市国家及びその後楯となる市民階級の圧力に敢然と抵抗し、自らの武力を頼みに、衰亡の一途を辿る皇帝の權威や、没落しつつある騎士階級のために、時と場合によっては、掠奪、暴行もいとわず戦い続ける勇者で、遂には、友人の裏切りによって悲劇的な最期を遂げる地方領主なのだが、所謂、シュトルム・ウント・ドラング（疾風怒濤）文学の典型的な英雄である。この乱世に生きる一匹狼のような主人公の生きざまには、ちょうど同じように、掠奪と合戦を業としていたスコットの祖先達の生きざまを彷彿とさせるものがあったはずだ。それに、E・ジョンソンの言うように、足の不自由なスコットにとって、片腕を失い、義手をつけている故に、「鉄の腕のゲッツ」とも呼ばれていたこの英雄は、彼に親近感を抱かせる人物だったかもしれない。<sup>(4)</sup> いずれにせよ、群雄割拠する波瀾の時代に、山城に立てこもり、他国からの圧力に一切屈せず、大志を抱きながら、戦いに明け暮れていたこの誇り高い勇士が、ゲーテの才能によって、見事に、文学作品として結実しているのを知り、スコットは、自分も、自分の祖先達の、粗野ながらも英雄的な生き方を描いてみたいという思いに駆られたと述べている。見方によっては、野盗や野武士のような、無法の生活を送る逞しい男達、彼らの生き方が、立派な文学の題材となり得るということは、スコットにとって、開眼でなくて何であっただろう。この作品の翻訳は、1799年に出版され、大した反響を呼ぶこともなく忘れ去られていったが、荒唐無稽な怪奇趣味を脱して、大地に根をおろした、生きた世界へと、スコット文学の指針を定める契機となった点で、注目されるべきである。

この「ゲッツ」が主要な動機となって、スコットに自分の祖先が活躍

する作品を書いてみたいと思い立たせたわけだが、そもそも、スコット一族というのは、スコットランド南部、国境地方（Border District）に勢力をはっていた武名高い一門で、頭領といただくのはバックル一家の当主、現在はバックル公爵である。スコットは、その分家にあたるハーデンのスコット（Sir Walter Scott of Harden）の6代目の末裔にあたる。このスコット一門も、近隣の豪族同様、自らの武力だけを頼りに、スコットランドの法にも、イングランドの法にも従わず、英国領や自国領での戦いと掠奪の毎日を送っていた。この一族の武勇譚は、この地方の民謡に多く歌われ、スコット自身も、彼の「国境地方民謡集」の中に、バックルのウォルター・スコットやハーデンのスコットが登場する「テルファーのジェミー」*Jamie of Telfer* を採録している。

スコットは、この「力」だけがものを言う、一種の 'Chaos' を生きる逞しい男達に、大いに創作欲を刺戟されていた模様で、ロ德里ック（湖上の美人）、バートラム（ロークビー）、ファーガス・マッキークヴァー（ウェイヴァリー）、ボア・ギルベール（アイヴァンホー）など、所謂<sup>(5)</sup> Dark Hero が、様々に姿を変えて登場してくるのに気付く。

スコットの家系は、「最後の吟遊詩人の歌」にも登場する、上述の勇士 Watt of Harden にはじまる。彼と「ヤロウの花」と歌にまで歌われた美しい妻メアリーとの間に生まれた息子、ウィリアム・スコットは、美男の誉れの高い戦士だったが、近隣のエリバンク領を襲撃した際、領主の Sir Gideon Murray に捕えられ、絞首刑となるか、領主の醜い三人娘の中でも、とりわけ無器量で、Meiklemouthed Meg（大口のメグ）と仇名され、近隣四州の中で、まず2人といないと噂された程の醜い娘をめとるか、との難題をもちかけられ、大口の娘をめと

って、生き長らえる方を選んだという、民謡の恰好の主人公だった。このウィリアム・スコットの息子が、初代の *Walter Scott of Rae-burn* となった。更に、その息子の *Walter Scott* は、根っからの *Jacobite*（スチュアート王党派）で、ジェームズ2世を最後に、スチュアート王家が廃止されると、ただちに、ダンディー子爵クレヴァハウス將軍の率いる反乱軍に投じ、事破れて、土地も財産もすべて失い、「最後の吟遊詩人の歌」に歌われているバックルー及びモンマス公爵夫人アンの助命嘆願がなければ、処刑を免かれなかった所だったという。彼は、スチュアート王家が王位にもどるまでは、剃刀をあてないとの誓いを立て、髯を伸ばしていたので、*Walter Scott the Beardie*（髯のウォルター・スコット）と呼ばれていた。スコットはこの *Beardie* の曾孫にあたるわけだが、日頃この祖先の活躍を耳にしている感化をうけていたこともあり、又、スコット一門は、大体スチュアート王家最良ということもあって、スコットの心の中にも、*Jacobite* 的な感情が育っていたのも当然といえよう。

所で、スコットが、この「最後の吟遊詩人の歌」を執筆する直接のきっかけとなったのは、1830年版に作者が付けた序文によれば、才色兼備のはまれ高い、若きダルキース伯爵夫人（後のバックルー公爵夫人）ハリエットに、民謡風の物語詩の詩作をすすめられたことだった。彼女の夫名ダルキース伯は、バックルー公の長子で、スコットからみれば、本家筋にあたるわけである。スコットの祖先の1人でもあり、1688年に、韻文で、「スコット一門正史」*A True History of Several Honourable Families of the Right Honourable Name of Scott* を出したスコット一門の歌人（*Bard*）Min-



strel Scott of Satchells (サッチェルズ) の例にならって、自らも、スコット一門の「歌人」をもって任じ、自伝(1808年)の中で、祖先を列挙したあとで、"… no bad genealogy for a Border Minstrel" (国境地方の歌人として恥かしくない家柄)に生れたことを誇りにしていたスコットにとって、美貌の本家の若夫人の依頼には、勿論絶対服従あるのみである。"To hear is to obey." (聞くことは、従うことだ)と彼は述懐している。

ハリエットはダルキース伯と結婚後、はじめてスコットランドの地を踏んだのだが、文学の素養もあり、スコットの良き理解者であった。又、国境地方の民謡、伝説にも大いに興味を抱き、たまたま、ラングホルムという村に住む一紳士が、その地方に伝わるギルピン・ホーナー(Gilpin Horner)という妖怪の伝説を彼女に話したことから、彼女は、この妖怪を題材としたballad(譚詩)を作ってはどうかと、スコットにすすめたのだった。

スコットは、はじめ、この妖怪のいたずらで、中世領主の宴会が大混乱になるというストーリーで、短い古代民謡風の模倣作を作り、彼が準備していた「国境地方民謡集」の第3巻に入れるつもりであったが、妖怪譚にとどまらず、中世期におけるスコット一門の年代記を、文学の形で、後世に残そうという構想が広がるにつれて、規模が広がり、独立した長編詩がここに誕生したのだ。

最初にダルキース伯夫人から話があった時、スコットは、その2年ほど前の1800年頃、彼の友人で、「スコットランド各地の風光案内記」*Remarks on Local Scenery in Scotland*の著者でもあるストダート(Sir John Stoddart)に、各地の美しい風景を紹介し

た際、やはり、ストダートと親しい湖畔詩人たち、サウジー、ワーズワース、コウルリジなどの詩句を朗詠してもらったことがあったが、その中で、未完で、当時未発表だったコウルリジの「クリスタベル」の清新な韻律が、非常に印象的だったため、スコットは、新しい詩に、その詩形を採用することにした。

このストダートという人物は、大変な記憶力の持主だったらしく、スコットには、自分がそらんじている詩行を語って聞かせていたという。又ちなみに、ワーズワース兄妹が、1803年にスコットを訪問したのも、このストダートの紹介によるものだった。ワーズワースはこの時、「最後の吟遊詩人の歌」の前半4曲を朗読して聞かせてもらっている。

スコットが、この詩の執筆にとりかかったのは、1802年で、フランス革命後の物情騒然としている時節柄、彼が義勇軍軽騎兵部隊の補給係将校をしていて、訓練中、馬に蹴られて足を負傷し、エジンバラ郊外、マッスルバラの兵舎で、2週間程、病床についていた時だった。これが、民謡収集における友人のリードンに、「この詩は軽騎兵のような作品で」などと語った由縁の一部でもあったようだ。何しろ朝から晩まで、騎兵<sup>(6)</sup>の駒音を聞きながら筆を進めていたのだから。

最初の2曲程が出来た頃、法律家ではあるが、文学にも造詣の深い2人の友人、William ErskineとGeorge Cranstounに見せた所、その中には、スコットが内心自信満々だったコウルリジ風の詩行も含まれていたにもかかわらず、この2人の反応は、予想に反して冷たく、スコットは落胆の余り、この試作原稿を火に投じてしまった。所が、しばらくして、アースキンに、その後の進行状況を尋ねられ、はじめて、彼らが大いに興味をもっていたのを知らされたという。アースキンは、

その上、その詩の曲の1つ1つに、プロローグをつけるというアイディアを示唆したのだが、スコットは、それをもとに、想を練った末、老いた吟遊詩人が、美しい公爵夫人の前で、古い吟遊詩を歌うという、J.G. ロックハートの言葉<sup>(7)</sup>を借りれば、「ホーマーも羨やむ」魅力的な形式が生れたのだった。

この詩は、100行の序詩にはじまり、その後6つのCanto(曲)が続くという形式をとり、「3日と3晩の出来事」を題材としている。献辞は、ハリエットの夫君で、やはりスコットの理解者であり、友人であったダルキース伯爵(後のバックルー公爵)チャールズに捧げられて、予定したよりもかなり遅れて、1805年に発表された。

## 2. 詩 形

スコットが、この詩の「前書き」の中で、述べている所によると、詩形として、彼は「古い韻文ロマンス」の形式を採用していると言っている。又、この形式によれば、定型詩にみられるような、詩行上の制約も少なく、リズム変化も容易につけられるので、国境地方の風俗習慣を、気儘に描写したいという作者の目的に合うだろうとも述べている。この「古い韻文ロマンス」の形式というのが、その後、大いに論議的となったもので、コウルリジが、彼の未完の名作「クリスタベル」*Christabel*(1816)で世に問うた詩形なのである。

所で、スコット自身が書いていることによれば、スコットは、スタートが「クリスタベル」を朗詠してくれたのに感銘を受け、早速新しい詩にその詩形を採用しようとしたということは前に述べた通りだが、ス

スコットは更に、この種の詩形が、二三の詩人によって、軽い小品に使われているのは知っていたが、「クリスタベル」によって、この詩形が、本格的な詩作に使われるのを教えられ、コウルリジに対して、弟子が師に対するような敬意を抱いているのだとも言っている。

スコット自身も指摘しているように、当時の読者層は、2行連(Couplet) 8音節4行詩形からなる、素朴なバラッド詩体に、やゝ食傷気味だったこともあって、彼が採用した、クリスタベル風の清新な詩形は、大変な評判を呼び、「最後の吟遊詩人の歌」は余りに地方色が強いため、スコットランド以外では読まれまいという、エジンバラ・レビュー誌の批評家、フランシス・ジェフリーの予言に反して、むしろイングランドで圧倒的な人気を拍したという。

所が、コウルリジが1816年に発表した「クリスタベル」の方は、その詩形が、先に発表された「最後の吟遊詩人」のものに酷似していることから、逆に模倣作ではないかと、疑われるおそれもあり、更に、詩行が不規則だとの批判も予想して、その序文の中で、コウルリジは、第1部(1797年)、第2部(1800年)の製作年次を公表し、そもそも、詩形は誰に属するなどというべき性質のものではないと断わりながらも、自分の方が、最初にこの詩形を採用したのだと述べている。又、詩形に関しても説明を加え、「クリスタベル」の中では、1行に4つのアクセントを持たせるが、この際、伝統的な手法のように、音節によって、foot(歩)を数える韻律法は一切採用しないのだといっている。このため、この形式を使った「クリスタベル」の場合、1行の音節の数は7から12、(齊藤勇博士の確認された所によれば、4から14)と変化を与えることが可能になるが、アクセントは、やはり4つなのであ

(8)

る。このような形で統一をとると、各行で、比較的自由に、imageryなどを織り込むことができ、ロマンチックな内容をもつ物語詩などには、うってつけというわけなのである。

しかし、この所謂New Principle（新手法）というのは、斉藤勇博士も書いておられるように、古い英詩の中にしばしば見られる原理であるから、18世紀の新古典主義の伝統には反していても、より古い伝統に根ざした形であり、古い詩を愛読していたスコット自身も、恐らく、ある程度、馴染みとなっていた詩形だったはずだ。事実、スコットが収集したバラッドの中にも、8音節4歩格の2行連が中心となり、他の押韻法や3歩格が混り合う詩形が、ひんばんに使われている。——結果的には、この形も「クリスタベル」詩形と非常に似たものになるわけだ。<sup>(9)</sup>

このように考えてみると、スコット自身、貸借関係を率直に認めてはいるものの、この点を過大に評価するのは穏当でない。この所は、スコットの言葉通り、コウリジの作品によって眼を開かされ、「古い韻文ロマンス」の形式を採用したという辺の所が事実であろう。それに、この詩形は、コウリジにあっては、suspenseのうちに、恐怖感を高めるのに効果があるのに反して、スコットの場合は、同じ詩形を使っているというように、使い方が、それぞれ、かなり個性的であるので、詩形は似ていても、生れてくる作品は、やはり、それぞれの作者のものといえよう。<sup>(10)</sup>

しかし、大和資雄氏ほか、多くの研究家によって指摘されているように、「クリスタベル」からの借用が、非常に顕著な詩行も散見される。特に前半に多く、

Jesu Maria, shield us well! (I, i, 5).

(イエス様、マリア様、我らを守らせ給え!)

は「クリスタベル」の

Jesu, Maria, shield her well! (I, 55)

(イエス様、マリア様、彼女を守らせ給え!)

からの借用であり、

" Sir William of Deloraine, good at need,  
Mount thee on the wightest steed,  
Spare not to spur nor tint to ride,  
Until thou come to fair Tweedside,  
... "(I, x x ii, 231-4)

(「危急の時に頼りになるデロレインのウィリアム殿、  
一番逞しい馬にお乗りなさい。

麗わしのトゥイード河のほとりにつくまでは、  
拍車を控えたり、乗り惜しみをしてはなりません。…」)

も、「クリスタベル」における

Ho! Bracy the bard, the charge be thine!

Go thou, with music sweet and loud,  
And take two steeds with trappings proud,  
… (Ⅱ, 484-6)

(これ、歌人のプレイシーはいるか、お前に申しつける！  
美しき音楽を高く響かせて行くのだ、  
華やかな飾りをつけた2頭の馬を連れて行くのだぞ)

の響きが感ぜられ、

Is it the roar of Teviot's side,  
That chafes against the scaur's red side?  
Is it the wind that swings the oaks?  
Is it the echo from the rock? (I, xxii, 130-3)  
(それは切り立つ断崖の赤い肌に打ち当る、  
テヴィオットの流れの咆哮だろうか？  
それは櫓の木を揺り動かす風の音だろうか？  
それは岩山から響き渡る木魂だろうか？)

或いは、

Why does fair Margaret so early awake,  
And don her kirtle so hastilie;  
And the silken knots, which in hurry she  
would make,

Why tremble her slender fingers to tie,  
Why does she stop, and look often around,  
As she glides down the secret stair?

(Ⅱ, xxvi, 298-303)

<sup>なにゆえ</sup>  
(何故美しきマーガレット姫は、そのように朝早く目を覚まし、  
そのようにあわただしく<sup>カートル</sup>寛衣を身にまとうのか、  
そして、急いで絹の紐を結ぼうとする  
彼女の細い指は、<sup>なにゆえ</sup>何故震えているのか、  
秘密の階段を、滑るように降りるとき、  
<sup>なにゆえ</sup>何故に、彼女は立止り、何度もあたりを見廻わすのか?)

などに見られる疑問文によるたたみかけるような手法も、「クリスタベル」の

The night is chill, the forest bare,  
Is it the wind that moaneth bleak? (I, 44-5)  
(夜気は肌寒く、森は荒涼としている、  
わびしく嘆きの音をあげるのは風だろうか?)

とか、

What makes her in the wood so late,  
A furlong from the castle gate? (I, 25-6)  
<sup>なにゆえ</sup>  
(何故彼女はそのような夜更けに、



城門から 1<sup>\*</sup>ファーロングも離れた森の中にいるのだろうか？)

・ \* 1 ファーロングは 220 ヤード

などの響きを留めているようだ。

「最後の吟遊詩人の歌」は、ハワード家の歌人、フィッツトラヴァが歌う詩 (VI, xvi-xx, 257-301) が、5 歩格のスペンサー詩形で書かれているほかは、一応、「クリスタベル」の詩形が書かれている。しかし、後半の詩行は、クリスタベル風の自由な詩行ではなくて、4 歩格の民謡調に統一されている。4 つのアクセントを持っているのだから、クリスタベル詩行と見ることもできるが、スコットにとって一番扱い易いのは、日頃耳にして馴れ親しんでいるバラッドのリズムだったようである。

### 3. 作 品

この詩の題材の中で、妖怪ギルピン<sup>(1)</sup>・ホーナーのエピソードは、ダルキース伯夫人の依頼によるもので、国境地方の伝説をもとにしているが、スコット一門の歴史に関しては、先に述べた、貧窮の一生を送った一門の歌人、Walter Scot of Satchells の「スコット一門正史」からその多くを得ている。スコットが小児麻痺の病後療養のため、空気の良いハイランドにある祖父ロバート・スコットの牧場で毎日を送っていた 4, 5 才頃、彼が最初に手にした書物のうちの 1 冊が、この古ぼけた本だったという。幼いスコットの心に焼きつけられた、この本の印象の鮮やかさは、1808 年に、この本を再読する機会を持った時、その

内容のほとんどを、古風な綴りにいたるまで、まだ、はっきりと記憶しているのが驚いたとスコット自身が語っていることから知ることができよう。

このほかに、スコットは、フランスやイタリアの中世ロマンス、北欧伝説、幽霊譚、歴史物語など、全く種々雑多な知識を、その頭の中に詰め込んでいたと語っているが、ロックハートの伝記によると、“Walter Scott, 1792 ” と上書きのある、スコットのメモ帳が偶然保存されていて、それを見ると、スコットの雑学そのもののような知識体系がうかがえるとのことだ。その中味は、北欧神話「オーディン主神の降臨」に基づくスカンジナビア語の原詩とラテン語訳、それに、トーマス・グレイによる英語の韻文訳、更に、北方民族の歴史に関する記述にはじまって、チャールズ1世の財政危機、カヌートやラングホーンらによる古い英語のコピー、それに、グレイの「エレジー」の一節、イタリアのカンツォネッタ、魔女や妖精の伝説や怪奇談などが続くなかで、「最後の吟遊詩人の歌」に登場する、ブランクサム城主夫人ジャンネット・ビートンと、俗に「性悪ウォット」(Wicked Watt)と呼ばれていた、彼女の夫、Sir Walter Scott of Buccleugh に関する記録<sup>12)</sup>などもあったそうである。

これは、スコット一門の歴史も含めて、21才のスコット青年の興味の傾向を知る上で、非常に面白い資料であると共に、この頃、彼が蓄積しつつあった知識が、最初の長編詩、「最後の吟遊詩人の歌」で集大成され、花開いたのだといっても過言ではあるまい。この詩の主な内容となっているスコット家の歴史、ブランクサム城主夫人や性悪ウォットに関しては、勿論言うまでもないが、スカンジナビア系の伝説と文学に

関しては、北方民族の歴史と伝統を継承する歌人、ハロルドの詩（VI，xxi-xxiii，306-403）の中に歌いこまれ、「エレジー」の雰囲気を与える詩行としては、荒武者デロレインがメルローズ寺院を訪れる際の寺院の描写の中に見出すことができるなど、作品の中のいたるところに、作者の幅ひろい「雑学ぶり」をしのばせる部分がある。

この詩のストーリーは、歴史の移り変りと共に、最後の吟遊詩人となった老人が、バックルー公爵夫人に、手厚いもてなしを受けたのを感謝して、6曲からなる古い歌を歌うという形式になっている。16世紀の半ば頃がその物語の時代として設定されていて、公爵夫人の祖先にあたり、魔法を使うと評判されているブランクサム城主夫人 ジャネット・ビートンがストーリーの中心となり、彼女をめぐる、さまざまな人物（その多くはスコット一門だが）がエピソード風に登場し、紹介されていく。

彼女の夫、バックルーのウォルター卿はスコット一門とセスフォード一門との間の抗争の際戦死し、彼女は固く復讐を誓う。所が、敵方の一族に、クランストン卿という青年騎士がいて、夫人の娘マーガレットと恋仲という「ロメオとジュリエット」的な主題が提示される。これに対して、夫人は絶対に反対の態度をとっている。

夫人は復讐のために、高名な魔術師、故マイケル・スコットの「秘法の書」の助けを借りようと、腹心の家臣デロレインを、聖ミカエル祭の深夜、遺体が埋葬されているメルローズ寺院へと走らせる。「秘法の書」を手にしたデロレインは、帰る途中、仇敵のクランストン卿に出会い、一騎討の末、瀕死の重傷を負う。クランストンの小姓が、例の妖怪ギルピン・ホーナーで、主人の命で、手負いのデロレインをブランクサム

城にとどけたあとで、幼い若殿を城外に連れ出し、森の中におきざりにする。幼い少年は、近くにいた英国勢に捕えられてしまう。

英国勢は、丁度この頃、騎士マスグレイヴの領地を掠奪したデロレインの身柄を求めて、大挙攻勢をかけてきていたのだ。急をきいて、スコットランドの援軍も各地から集まるが、結局、マスグレイヴとデロレインの間で一騎討ちをして正邪を決め、ブランクサムの子爵は、勝った側が受けとるということになる。一騎討ちの結果、デロレインが勝ったのだが、実はギルピン・ホーナーの策略で、負傷したデロレインの甲冑をつけたクランストン卿が勝利を得たのだった。クランストンの献身に心動かされた城主夫人は、若い2人の結婚を許し、英蘇両軍が、その祝宴に招かれているとき、大音響と共に尖光がひらめき、ギルピン・ホーナーが連れ去られてしまう。恐怖に打たれた武将たちは、マイケル・スコットの霊を慰めるために、メルローズ寺院へと巡礼に出発し、城主夫人も、魔法を今後使わないことを誓う、という所で終わっている。

登場する人物は、城主夫人ジャネット・ビートン、その夫「性悪ウォット」、ジャネットの父で、魔法を娘に授けたといわれるビートン大司教、デロレイン、詩人の先祖にあたるハーデンのウォット、ティンリンのウォット、ダグラス卿、デイカー卿、ハワード卿など、すべて、史実に基いた人物であり、クランストンとマーガレットのロマンスにしても、サッチェルズの「一門史」に、スコット一門の娘が、セスフォード一門の若者と恋仲となり、嫁いでいったという記述もあるらしく、全くのフィクションというわけでもないのだが、妖怪ギルピンだけは、異質で荒唐無稽であり、この詩の格調を著しく損ねているという批判も多い。

実際読んでもみても、この妖怪はなくてもよいようにも思われるが、

先に述べてきたように、この妖怪がこの詩の成立の契機だったわけだから、如何とも致し方がないわけだし、又、スコット自身の「文学的リアリズム」は、ある時代の歴史、世相、生活、あるいは独特の雰囲気表現するために、当時の人々の抱いていた迷信、俗信も再現すべしとしていたようで、妖精「アヴネルの白い婦人」を登場させて「僧院」*The Monastery* (1820) を失敗作にしたのもこのためだった。

いずれにせよ、この妖怪小姓は、Heroic な内容に、Grotesque な要素が混入するのを嫌う、新古典主義の立場に立つ批評家からは、受けが悪いが、E. ジョンソンなどは、plot の主要な担い手となっている点に注目しなくてはならないと述べている。ギルピンによる誘拐がなければ、バックルーの若殿は英国軍に捕えられることもなく、クランストンが少年を取りもどすきっかけもなくなるわけだからである。

「妖怪」の功罪は別にして、中世の再現にあたって、アリオスト風の騎士冒険お伽話の世界でも、又、フランスの宮廷ロマンス風の典雅な世界でもなく、血の通った、生きた人間の荒々しい素朴な世界を造りあげた点で、スコットは高く評価されて然るべきであろう。

登場人物の中で、クランストン卿の名が出るのは、セスフォード一門の末裔にあたる、親友のクランストン兄妹に対する友情の表われとみられている。

この詩は、一見、エピソードを綴ったモザイク細工のように見えるが、よくみると、テーマの面で、統一がとれている。多彩な中世絵巻の中で、見落されがちなこのテーマというのは、第1曲において、山の精が、川の精と対話をする部分に示されている。

But no kind influence deign they shower  
On Teviot's tide and Branksome's tower  
Till pride be quelled and love be free.

(I, xvii, 178-80)

(高慢さが消え、愛が解き放たれるまで、  
テヴィオットの流れにも、ブランクサム之城にも、  
星は心やさしい感応力をさしのべてはくれまい)

これは、城主夫人の高慢さが消え、若い2人の愛を自由にしてやるまでは、ブランクサムに平和は訪れまい、という意味だが、後に敵方のクランストンの働らきで、わが子を取り戻せた城主夫人は、高慢な態度を和らげ、若い2人の結婚を認め、山の精の予言通り、ブランクサムに平和が訪れることになるというテーマなのである。

スコットは「寛容」と「妥協」こそが、平和な社会をつくりあげるもとだ、というこのテーマを、色々な作品で、執拗に追いつづけることになるのだが、この第1作においても、すでに、その萌芽を見ることができる。

所で、スコットが、一門の歌人であると自任していたことは、先に述べたが、そもそもこの歌人(bard)というのはどのような身分のものかという点に触れておくと、ケルト文学研究家の中村徳三郎氏によれば、bardというのは、ケルト系の氏族の領主に直属していて、古い伝統的な作詩法について、学校で厳格な専門の修業課程を修了したもので、一族の系図や武勲を暗誦していて、饗宴の席で、豎琴に合わせて歌うばかりでなく、領主の子弟の教育も受けもち、戦いにおいては、使節の役

目も果す人物ということだ。<sup>(13)</sup>又、プレブル( John Prebble )によれば、特に古い身分構造を残しているスコットランドのハイランドにおいては、豪族( clan )の身分関係にあって、一番身分が高いのは勿論領主( chieftain )だが、家臣の中でこれに次ぐのが、領主の乳兄弟( foster brother )、次いで歌人( bard )、鼓笛手( piper )、布告役( bladier )、一般家臣の順になっていたという。歌人は名誉ある世襲職で、文書による歴史を持たない一族は、歌人の歌によって、その名や武勲を不滅にすることができた。歌人は、本来、戦いには参加せず、一族の戦いぶりを、つぶさに見とどけ、これを叙事詩の中に歌いこんだ。又、彼は一族の家系にも精通し、祖先の偉業をしばしば話して聞かせたので、一族のものは、みな、祖先の名を恥かしめないようにと、各自の最善をつくしたという。鼓笛手というのも世襲の名家で、領主の命でバグパイプを吹き鳴らし、一族の闘志をかき立てたり、悲しみに涙させたりするとともに、戦いにおいては、領主の傍を離れず、パイプを吹きならして士気を鼓舞するのが常で、しばしば、領主と共に生命を落すこともあったといわれている。又、布告役は、銀の声をもつものがこれにあたり、領主の代弁者として、他家との交渉にあたると共に、氏族間の<sup>(14)</sup>争い事などの前例を熟知していることが要求されていたという。

ところが、スコットの吟遊詩人というのは、その性格が、上の説明ほど明確に区別されてはいない歌人のようで、ほぼ歌人の役割りを果しながら、時には、鼓笛手、更に布告役の役目も受け持っているように思われる。ちなみに、スコットが用いた用語を列举してみると、Minstrel (23), Bard (10), Harper ( 堅琴弾き ) (5), Poet ( 詩人 ) (3) とあって( 注 カッコ内の数字は頻度 )、いずれも、殆ど同義に用いられ

ているし、その内容説明として、jovial priest of mirth and war (VI, iii, 3-4) 「楽しみ事と戦を司どる陽気な祭祀たち」というくだりもあることから、大体、今述べたようなタイプの詩人と理解すればよからう。

さて、スコットが、家柄からいって、一門の歌人として決して恥かしくないと感じ、自分でも、一門の bard として任じていたことは、前に述べた通りだが、伯爵夫人ハリエットに、詩作の依頼を受けた時、彼の心の中に、二重焼になった、あるロマンチックなイメージが浮かんでいたことは想像に難くない。ロックハートも、クロフフォード (Thomas Crawford) も指摘していることだが、それは、主家の若夫人の前にひざまづき、歌を捧げる歌人のイメージなのだ。<sup>(15)</sup> このイメージの第1は、ボウヒルのバックルー館において、「過去の歴史と詩歌」に傾倒している故に、賓客として扱われているスコット自身とダルキース伯夫人のイメージであり、第2は、老吟遊詩人が、バックルー及びモンマス公夫人に歌を聞かせている、17世紀後半のニューアーク城におけるイメージである。次に、第3は、16世紀なかば、つまり、この物語の時代に、やはり、バックルー家の居城、ブランクサム城における、城主夫人、ジャネット・ビートンと、彼女の近くに従い、この叙事詩を後世に残した、当時の一門づき、無名の吟遊詩人のイメージとが重なるのだ。

そして、スコットの意識の中には、もう1つのイメージが重なる。それは、熱狂的なスチュアート王党派で、「髯のウォルター・スコット」と呼ばれた彼の曾祖父が、第2のイメージに登場する美しい公爵夫人アンの前にひざまずいて、助命のとりなしを嘆願している姿である。子供の頃から、尊敬し、憧れていた曾祖父、その曾祖父に自分自身を同化し、



同一体験を共有するようになることは、詩人にとって、極く自然な心理過程であろう。そして、老吟遊詩人が、公爵夫人に庇護を求め、やがて、詩人としての誇りに目覚め、先人から受けつがれてきた一門の叙事詩を歌うというこの物語の構成が、そのまゝ、伯爵夫人にすすめられて、一門の歌人としての誇りに目覚め、先輩歌人 Walter Scott of Satchells らの手によって、受けつがれてきた一門の叙事詩を書こうとしている、スコットが心の中に描いた自分自身のイメージの投影であると考えのも、それ程不自然ではあるまい。

このような見方をすれば、この老吟遊詩人の中に、スコットの分身を見ることができるわけで、国境地方の伝説や、スコット一門の歴史や記録は別にして、スコットがどうしても表現したいと念じていた“personal”な感情や思想が、この詩の本来の物語の部分よりは、むしろ額縁にあたる、この老吟遊詩人の言動の中に、より多く注入されている事実も説明がつくわけである。

このようなことから、私は、この老吟遊詩人に焦点をあててみるものが、スコットが表現しようとしたものを探る一番よい方法ではないかと思う。

名宰相ピットがこの詩の中で1番好んだ部分は、彼の言葉によると、老吟遊詩人が、公爵夫人の前で、歌を聞かせる前に、不安と自信のなさで、逡巡する場面で、むしろ絵画の題材としてふさわしいこの場面が、詩の形でかくも見事に表現されているのに感激したとのことだ。<sup>(16)</sup>政治家の賞め言葉というのは独特なものだとは思いますが、たしかに、この場面は印象的だ。

病み衰えたスコットランドを象徴するかのように、老詩人は病弱で、

年老いている。スチュアート王家が廃されて以来、吟遊詩人の芸は、罪悪とみなされ、蔑まれていた。かつては、客として、貴族の客間の上席についていた老詩人は、今や放浪の堅琴弾きとなって、家毎に、糧を乞う生活にまで落ちている。この貧しい老人に、暖い手をさしのべたのが、スコット門の盟主である公爵夫人アンである。公爵夫人に歌を所望された老人には、詩人としての誇りが甦えってくるが、又、不安も大きい。ためらう彼を力づけたのは、公爵夫人のやさしいたわりだった。忘れられかけた古い歌を歌いたいのだと彼は言う。

Amid the strings his fingers strayed,  
And an uncertain warbling made —  
And oft he shook his hoary head.  
But when he caught the measure wild,  
The old man raised his face, and smiled,  
And lightened up his faded eye  
With all a poet's ecstasy!  
In varying cadence, soft or strong,  
He swept the sounding chords along:  
The present scene, the future lot,  
His toils, his wants, were all forgot;  
Cold diffidence, and age's frost,  
In the full tide of song were lost.  
Each blank, in faithless memory void,  
The poet's glowing thought supplied;

And, while his harp responsive rung,  
It was thus the Last Minstrel sung.

(Introduction, 84-100)

( 豎琴の弦の間を彼の指はさまよい、  
そして、不安げな楽音が響いた ——  
そして、幾度となく、彼は白髪頭<sup>しらが</sup>を横に振った。  
しかし、かの荒々しい調べを思い起した時、  
老人は顔をあげ、微笑みをうかべた。  
そして、彼の衰えかけた眼は  
まさに詩人の興奮で輝やきわたった！  
弱く、あるいは強く、響きを変化させながら、  
彼は次々に和音を変えて弾き続けた。  
眼の前の光景、未来の運命、彼の苦しい生活、  
彼の貧窮、それらはすべて忘れられてしまった。  
冷めたい不安感、老令ゆえの活気なさ、  
これらも奔ばしりである歌の流れの中に消えてしまった。  
頼みにならない記憶力が残した空白は、  
詩人の燃える思いが、これを滴した。  
そして、豎琴の高鳴る響きに合わせて、  
「最後の吟遊詩人」は次のように歌った。 )

はじめに見られる、老詩人のためらい、不安は、はじめて長編詩に取組もうとするスコット自身の不安感を表わしているようだ。しかし、美しい夫人のはげましに勇氣を得て、詩作に取かると、今度は、詩人の興

奮にとりつかれ、ひたすら情熱のおもむくまま筆を走らせる詩人スコットの姿がそこにある。スコットは、詩興のおもむくまゝ、1週間で1曲を完成したこともあったと云っている。

第1曲を歌い終ると、老詩人は自分の歌について、又不安に駆られる。夢中でこゝまで歌ってみたが、つたない芸のために、聴衆を失望させはしなかったろうか。

Here paused the harp; and with its swell  
The Master's fire and courage fell;  
Dejectedly and low he bowed,  
And, gazing timid on the crowd,  
He seemed to seek in every eye  
If they approved his minstrelsy;  
And, diffident of present praise,  
Somewhat he spoke of former days,  
And how old age and wandering long  
Had done his hand and harp some wrong.

(I, xxxi, 346-355)

(こゝで豎琴は止った。そして、高まった響きと共に、  
名手の熱情と勇氣も失われていった。  
彼はうやうやしく、深々と一礼して、  
並みいる人々を小心げに見守りながら、  
彼の吟遊詩が彼らの気に入る所をなっただろうかを  
皆の目の色から探ろうとしているものようだった。

そして、その場の賞讃を得られる自信のないままに、  
彼は昔の日々のことなどを物語り、  
寄る年波と長い放浪のため、  
彼の手にも、彼の豎琴にも幾分衰えがきたなどとも言った。

気の弱いこの老人を力づけたのは、やはり公爵夫人と姫君たちだった。  
作品の良し悪しを判断するのは、結局読者であり、読者に受ける作品  
こそ、すぐれた作品であるという考えを持ち続け、自分の判断ではなく、  
友人の批評を頼りに、作品を書き続けたスコットの、自信のない一面を  
のぞかせる場面である。

さて、貴婦人方の激励を得て、少し休息をとった後、老詩人は、有名な冒頭部ではじまる第2曲を歌いだす。

If thou wouldst view fair Melrose aright,  
Go visit it by the pale moonlight;…

(Ⅱ, i, 1-2)

(もしもあなたが美しいメルローズ寺院を正しく眺めたいのなら、  
青白い月光のもとで、そこを訪れるがよい)

第2曲を終ると、老詩人は、ワインを振舞われ、心も軽くなったもの  
か、軽い恋の歌を歌う。年はとって、詩人である以上、「愛」という  
テーマに、どうして無関心でいられようかと、クランストン卿とマーガ  
レット姫との恋を歌うのである。

第3曲を歌い終ると、このような名手が、ひとり漂泊の旅を続けてい

るのは、まことにいたわしいが、頼りになる息子か娘はいないのかと尋ねられる。

'Ay, once he had — but he was dead ;' —  
Upon the harp he stooped his head,  
And busied himself the strings withal,  
To hide the tear that fain world fall.

(Ⅲ, xxxi, 429—32)

(「はい、昔は息子もおりました。—しかし、もう死んでしまいました!」—  
堅琴の上に、彼は首うなだれ、  
こぼれかゝった涙をかくすため、  
せわしげに堅琴の糸をまさぐっていた。)

そして、彼は、息子が、勇敢な戦死を遂げた旨告げる。

Low as that tide has ebbd with me,  
It still reflects to Memory's eye  
The hour my brave, my only boy  
Fell by the side of great Dundee.  
Why, when the volleying musket played  
Against the bloody Highland blade,  
Why was not I beside him laid!  
Enough—he died the death of fame;  
Enough—he died with conquering Graeme.

(私の人生の流れは力衰えてしまったが、

私の勇敢なひとり息子が、偉大なダンディー將軍<sup>かわら</sup>の傍で  
倒れた時のことを、未だに、

私の「記憶」の眼に映しだすことができる。

何故、血塗られた長剣を振う高地軍<sup>ハイランド</sup>に向って、

小銃の一斉射撃がはじまったとき、

何故私は息子のそばで倒されなかったのだろうか！

しかし、もうよいのだ — 彼は名誉ある死を遂げたのだ。

もうよいのだ — 彼は勝利を得たグレイム將軍と共に死んだのだ)

これはキリー克蘭キーの戦い(1669年)において、ダンディー子爵グレイム・クレヴァハウスが率いる、スチュアート王党派からなる反乱軍が、政府軍を破ったときのことを述べているので、この勝利は、ロバート・ブルース王による、バノックバーンの勝利(1314年)と共に、スコットランド人にとって、忘れられない勝利の記憶として焼きつけられている事件である。もっとも、キリー克蘭キーの戦いでは勝利をおさめたものの、指揮官のクレヴァハウスが戦死したため、反乱軍はやがて瓦解し、この戦いに参加した「髯のウォルター・スコット」は、公爵夫人のとりなしで、やっと処刑を免かれたことは、前述の通りである。この曾祖父が息子の死を悲しむ(つまり断ち切られた歴史を悲しむ)老詩人の原型となっているのかもしれない。そして、スコットランド人としての誇りと愛国心をこゝで歌いあげる老歌人の姿は、スコット門の歌人から、徐々に、スコットランド全体の歌人へと、その意識が移行

し、この後、次々に、スコットランドの歴史を題材とした作品を、熱っぽく歌って、世に問おうとしているスコットの心理的転機を示しているように思われる。

第4曲も終り、老人は、公爵夫人に、遠く過ぎた昔の出来事や、今や忘れられかけた人々のことを、よく覚えていることで、賞讃の言葉を受ける。

The Harper smiled, well-pleased; for ne'er  
Was flattery lost on poet's ear:  
A simple race! they waste their toil  
For the vain tribute of a smile;  
E'en when in age their flame expires,  
Her dulcet breath can fan its fires:  
Their drooping fancy wakes at praise,  
And strives to trim the short-lived blaze.

(N, xxxv, 618-25)

(堅琴弾きは大いに喜び微笑をうかべた。賛辞が詩人の耳に  
快よく 響かなかったためしはいまだかつてなかったのだ。  
彼らは純な心を持った人種だ！ 彼らは微笑という  
空しい捧げものを求めて、彼らの労力を浪費する。  
そして、彼らの情熱の炎が、老令と共に消え失せる時でも、  
女性のやさしい吐息が、その火をあおぎ立てることができる。  
賞讃の言葉を聞けば、彼らの衰えかけた空想力も再び目覚め  
残り少い炎をかき立てようとするのだ)



これは、詩人スコットの心意気である。女性の賛辞によって、詩想が湧き、詩人が誕生するのだ。スコットの周りにも、伯爵夫人をはじめとして、数多くの女性が登場する。バイロンの場合とは全く違うが、やはり、スコット文学の成立にあたって、女性の友達の助言協力が大いに力があつたことは、伝記を読んでいても知ることができる。又、次に、詩人としての誇りも述べられる。

Call it not vain, they do not err  
Who say, that when the poet dies,  
Mute Nature mourns her worshipper  
And celebrates his obsequies:  
Who say, tall cliff and cavern lone  
For the departed Bard make moan;  
That mountains weep in crystal rill;  
That flowers in tears of balm distill;  
Through his loved groves that breezes sigh  
And oaks, in deeper groan, reply;  
And rivers teach their rushing wave  
To murmur dirges round his grave.

( V , i , 1-12 )

(それをうぬぼれとは呼ばないで欲しい。詩人が死ぬ時、  
物言わぬ自然は彼女の崇拜者の死を悼み、  
彼を葬<sup>とむら</sup>う儀式をとり行なうと、  
又、そそり立つ絶壁やもの淋しい洞穴も

この世を去った詩人<sup>うたびと</sup>を嘆き悲しみ、  
山々は水晶のように清らかな溪流の響のうちにその嘆きをあらわし、  
咲く花は香り豊かな涙の露をしたたらせ、  
彼が愛した森木立の間で吹く風は溜息をつき、  
樅の木々もこれにこたえて重苦しいうめき声をあげる、  
又、流れる川も、彼らの波音高い奔流に、  
彼の墓のまわりでは、小声で挽歌を歌うよう指示すると  
言う人々は決して誤まっていたのではないのだ)

これは、次の2つの節(stanza)で説明してあることだが、過ぎ去った昔の武勲であろうと、悲恋の物語であろうと、詩人の歌によって、はじめて後世に伝えられるのだ。詩人こそ、過去の栄光を後世に伝える務めを担っているのだという自覚が、オシアン風の歌人のイメージと重なって、スコットの中にあるということがうかがえる一節である。詩人スコットは、そのスタートの時から、抒情詩人ではなく、年代記作家的詩人だったことがわかる。彼の意識の中では、bardの伝統を受け継ぐ最後の1人が自分である、という自覚と気負いがあったもののように思われる。

第五曲が、マスグレイヴの死をいたむ哀歌で閉じられると、聴衆は老人にたずねる。豎琴のこれほどの名手でありながら、何故この貧しく、情の薄いスコットランドを放浪しているのか。豊かなイングランドに行けば、もっとねんごろにもてなしてもらえるのではないか。

The aged Harper, howsoe'er

His only friend, his harp, was dear,  
Liked not to hear it ranked so high  
Above his flowing poesy:  
Less liked he still that scornful jeer  
Misprized the land he loved so dear:  
High was the sound, as thus again  
The Bard resumed his minstrel strain.

( V , x x x , 5.30-7 )

( 年老いた堅琴弾きにとって

唯一の友となった彼の堅琴は大切ではあったが、  
その堅琴が胸の奥から湧いて流れる彼の詩歌よりも  
高く評価されるのを彼は好まなかった。  
又、軽蔑をふくんだ嘲笑が  
彼が心から愛している土地を不当に評価しているのが  
もっと気に入らなかった。声高らかに、再び次のように、  
うたびと  
歌人は彼の吟遊詩を歌いはじめた )

詩人の誇りは音楽よりも、その詩行にあるのだ。又、スコットランド  
こそ、詩人の愛してやまない土地なのだ。スコットのスコットランドへ  
の愛は、こゝで、激しく燃え上る。

Breathes there the man, with soul so dead,  
Who never to himself hath said,  
This is my own, my native land!

Whose heart hath ne'er within him burned,  
As home his footsteps he hath turned,  
From wandering on a foreign strand!

(V, i, 1-6)

(これこそわが国、わが祖国なのだ  
と自らの胸に語りかけたことがないほど、  
魂の死んだ男が果してこの世に生きているであろうか！  
異国の岸辺を放浪したあとで、  
故郷へとその足を向けたとき、  
身内で心が燃え上らなかったような者はいるであろうか！)

O Caledonia! stern and wild,  
Meet nurse for a poetic child!  
Land of brown heath and shaggy wood,  
Land of the mountain and the flood,  
Land of my sires! what mortal hand  
Can e'er untie the filial band,  
That knits me to thy rugged strand!

(V, ii, 17-23)

(おお、カレドニアよ！ きびしく荒涼たる国、  
詩心豊かな子供にふさわしい育ての母よ！  
褐色のヒースと生い茂る森の国、  
山と湖の国、  
私の父祖の国よ！お前の荒々しい岸辺に、

私を結びつけている、この親子代々の血縁の絆を、  
如何なる人の手が引きさくことができようか！)

詩人スコットの意識は、この段階に至って、もはや、単にスコット一門の歌人ではなくなっているのがわかる。失われゆくスコットランドの歴史、風土に対する愛を、力強く歌おうとする詩人の決意が、切々と感じられる1節である。このすぐあとで、老詩人は、彼の心はスコットランドの美しい自然と共にあるのだ、過去の栄光は亡び去っても、それを取り巻いていた自然に変わることがない、どんなに老い、衰えようとも、彼の愛するスコットランドをいつまでも放浪していたいのだ、と訴える。これは、祖国スコットランドを愛してやまなかったスコットの真情であろう。

やがて、第6曲も終ると、吟遊詩人は姿を消す。又、さすらいの旅に出たのだろうか？ いや、そうではなかった。公爵夫人の住むニューアーク城の近くに、老人は小さい庵を建て、そこに彼は居を構えたのだ。そこで、彼は難渋している旅人に助力を与える毎日を楽しんでいたが、夏の気持のよい日などには、老人に又詩人の情熱が目覚めるのだった。

Then would he sing achievements high,  
And circumstance of Chivalry,  
Till the rapt traveller would stay,  
Forgetful of the closing day;  
And noble youths, the strain to hear,  
Forsook the hunting of the deer;

And Yarrow, as he rolled along,  
Bore burden to the Minstrel's song.

( VI , x x x i , 5 7 5 - 8 2 )

( そういう時には、彼は英雄達の華々しい武勲の数々や、  
騎士道盛んなりし時代の物語などを歌って聞かせるのだった。  
そして、これに聞き惚れた旅人は、  
日の暮れるのを忘れてその足を留め、  
貴族の若者たちも、その調べを聞こうとして、  
鹿狩りをやめてしまった。  
そして、ヤロウ川は、不断の流れを続けながら、  
吟遊詩人の歌に響きを合わせるのだった )

この印象的な終結部は、スコットが、この詩を執筆している間中、常に思い描いていた夢だったようだ。ロックハートによれば、この詩を書いていた1804年当時、ニューアーク城趾のすぐ近くにあるブロード・メドウズ ( **Broad Meadows** ) という、ヤロウ川北岸の土地が売りに出ることになり、天気の良い夏の日など、スコットはダルキース伯夫妻と、その近くをよく馬に乗って散策し、その土地を物欲しそうに眺めていたとのことだ。<sup>(17)</sup> スコットは結局この土地を手に入れることはせず、ドゥイード河畔に、アボッツフォードの豪邸を建てることになるのだが、スコットランドの美しい自然の中に居を構え、スコットランドの栄光を、後世の人々に歌って聞かせる老詩人のイメージは、まさに、スコット自身のイメージに他ならないことがわかる。

そして、こうして、老吟遊詩人に投影された、スコットの詩人として

の意識を辿って行くと、最初は、自分の祖先と、スコット一門の歴史を中心とする長編詩を書こうという程度の、多分に personal な意識しか持っていなかった筈である。所が筆を進めるに従って、構成がひろがり、中世の武将たちの生活が、生き生きと描かれるにつれ、スコットのスコットランドへの愛国心が盛り上り、その感情移入がこの詩を非常に感銘深いものにしたようである。

この感情移入は、当時のスコットランド人に潜在する Jacobitism に大きな共感を与えたのは勿論だが、祖国を愛する真情や、ノスタルジックなロマンチズムは、スコットランド人の感情には無縁の読者の心も捉えるようになったのだ。しかし、このことの故に、スコットを反英国主義の詩人と連断してはならない。スコットの愛国心はあくまでも、ノスタルジーの中に、その発露を見ることができる種類の、エレジー風の要素をもっているのだ。

さて、スコットの極めて個人的な動機にはじまったこの詩作が、広く読者の心を捉えるようになったという事情は、失恋の傷を癒すために、自分を去って行ったベアトリーチェを美化し、自分を窮地に陥し入れた憎むべき輩を、煉獄や地獄に落して、呪いかつ復讐しようとした、ダンテの極めて personal な情熱が「神曲」を生み、手に入れた珠玉のような宝を、腹黒い部下の根も葉もない作り話を信じて、失ってしまう愚かな黒人を嘲笑しようという、極めて卑小な意図のもとに書かれたシェクスピアの作品が、筆を進めるに従って、その人間像が大きくひろがり、「オセロ」という傑作になったのと、どこか、似通った所がある。大作家というものは、動機がどんなに矮少なものでも、その作品は、その才能の偉大さに応じて花開くものようである。

以上この作品を概観してきて、この作品がノスタルジックなロマンチズムを見事に開花させている点、「血の通った」逞しい人間像を力強く描いている点、寛容と愛が平和のもとであることを説いている点、祖国スコットランドへの断ち難い愛国心を歌っている点、絵空事ではない歴史世界を再現させている点など、スコット文学の特質ともいふべき要素を一応みな備えている作品であることがわかる。そして、34才となり、いよいよ文学者として成熟したスコットが、その文学修業中に貯えたものを、一気に注入して、世に問うたのがこの作品であることを考えると、この作品が、スコット文学の成立を告げると共に、その本質を示す作品として、彼の作品の中では勿論、英文学史上でも、重要な意味をもった作品だということがいえよう。(1979.1.30)

## 注

- (1) J.G.Lockhart: The Life of Sir Walter Scott, Dent, (以下J.G.L.と略称) p.226
- (2) J.G.L. p.29
- (3) ゲーテ「詩と真実」第2部
- (4) E. Johnson: Sir Walter Scott, The Great Unknown, p.129
- (5) A.Welsh: Hero of The Waverley Novels
- (6) J.G.L. p.109
- (7) J.G.L. p.130



- (8) S.T.Coleridge:Christabel, 研究社, Introduction  
 (9) E.Johnson:The Great Unknown,p.338  
 (10) Ibid. p.338  
 (11) Ibid. p.15  
 (12) J.G.L. pp.60-1  
 (13) オシアン, 岩波文庫, p.448  
 (14) J.Prebble:Culloden, pp.43-4  
 (15) J.G.L. pp.130-1; T.Crawford:Sir Walter Scott,  
 Selected Poens, x  
 (16) J.G.L. p.133  
 (17) J.G.L. p.131-2

# テ キ ス ト

Scott, Poetical Works, ed. J.L.Robertson, O.U.P.,  
 London, 1904  
 Sir Walter Scott, Selected Poems, (ed.) T.Crawford,  
 Clarendon Press, Oxford, 1972

# 参 考 書 目

J.G.Lockhart:The Life of Sir Walter Scott(1 vol.),  
 Dent, London, 1906  
 T.Crawford(ed): Sir Walter Scott, Selected Poems,  
 Clarendon Press, Oxford, 1972  
 E.Johnson:Sir Walter Scott, The Great Unknown,

Hamish Hamilton, London, 1970

大 和 資 雄：スコット，研究社，1955

齊 藤 勇(ed)：Christabel，研究社，1930

H.Grierson：Sir Walter Scott,(Rep.of Columbia  
U.P.,N.Y., 1938)

M.McLaren：Sir Walter Scott, The Man & Patriot,  
Heinemann, London, 1970

G.Saintsbury：Sir Walter Scott, O.Anderson &  
Ferrier, Edinburgh, 1897 (Rep.)

J.Buchan：The Life of Sir Walter Scott, Cassell,  
London, 1932

A.Welsh：The Hero of The Waverley Novels,  
Atheneum, N.Y., 1968

J.Prebble：Culloden, Penguin, Harmondsworth, 1967